観能のタベ

（石川県立能楽堂）

令和元年八月十七日（土曜日）午後五時開演
演目解説　村戸弥生（金沢美術工芸大学非常勤講師）

狂言　二人大名（ふたりだいみょう）

野遊びに出た大名二人が通りかかった使いの者を脅して太刀を持たせます。太郎冠者役を強いられた使いの者は、怒って太刀を抜き、脅し返して散々に二人をなぶります。二人の小さ刀を奪い、小袖裃を脱がせ、犬の食い合い、鶏の蹴り合う真似、あげくは京の都で流行する起き上がり小法師の真似まで強います。これが浮きに浮いた楽しい謡い物です。真似る二人も興じ募って我を忘れるうちに、刀や着物は使いの者に奪い去られます。

能　是界（ぜがい）

空を翔（かけ）り海を越えて東の方（かた）日本をめざす天狗（前シテ）がいました。日本が仏法の盛んな神国と聞いて、慢心の輩（ともがら）を天狗道に誘引し自分の行力を試そうとする、大唐の天狗の首領是界坊です。まず都の北西愛宕山（あたごさん）に着いた是界坊は日本の天狗を代表する太郎坊（ツレ）に協力を求め、日本の天台山というべき比叡山を狙（ねら）うことにします。仏敵・法敵の魔境に沈み鬼畜の身を借る悲しさを、天狗たちなりに思わないわけではありません。不動明王に通じないと分かっていても、慢心の旗矛を掲げるのが天狗の宿命です。是界坊たちは恐れる心を励まして嵐と共に比叡山に向かいます（中入）。都では天狗の妨げが始まり、祈祷の勅命を受けた比叡山の僧たち（ワキ・ワキツレ）が急いで山を下ります。その途中、僧の乗る車の前に是界坊（後シテ）が襲来します。是界坊は仏道即ち魔道であると挑発し、僧は魔仏は一つ、人間の心は清浄にして不動であると祈ります。祈りの声に連れて不動明王や王城の守護神たちが是界坊を取り囲み、神風を吹かせて是界坊の通力を消滅させます。二度と来ないという声を空に残して、是界坊は雲路に消えます。是界坊絵巻に取材した室町中期、竹田法印の作かとされます。

西村　聡（金沢大学人間社会研究域教授）

（装束附）　前シテ（是界坊）　兜巾をいただき、厚板を着附に着、白大口をはき、上に水衣を着て、篠懸をかけ、腰帯をしめ、小刀をさす。
後シテ（天狗）　赤頭をつけ、大兜巾をいただき、大べし見の面をかける。

（午後七時頃終了予定）